



TITLE:

星の講座：古代人と「南十字架」星座：附、各緯度に於ける星々の姿

AUTHOR(S):

CITATION:

星の講座：古代人と「南十字架」星座：附、各緯度に於ける星々の姿.
星 1930, 3: 1-8

ISSUE DATE:

1930-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168997>

RIGHT:

星 星 星 星 星 星 星 星 星 星 星 星

1930年

(第 3 號)

3 月

座 議 の 星

古代人之「南十字架」星座

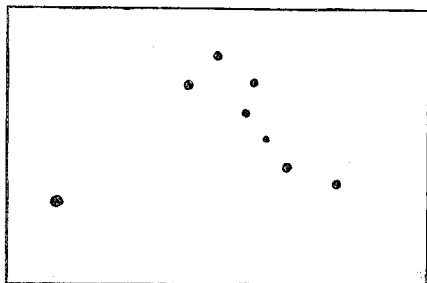
(附、各緯度に於ける星々の姿)

まるい地球の世界に住んでゐる吾々は、其の住んでゐる各地の特異な事状と共に、その地の緯度によつて、天の星の見える様子が違ふといふことは、天文を學ぶものが最初に知らなければならぬ根本知識である。京都の緯度は北 35° だから、北極星の高度がやはり此の 35° に近い。又、札幌は北緯 43° だから、此所では北極星が 43° の高さに見えてゐる。鹿児島は北緯 31° だから、こゝでは、北極星が、京都や札幌で見たよりも著しく低く見える。

こうした星の高低の違ひは、決して、北極星ばかりでは無く、すべての星の見える位置が皆可なり變つて來て、之れが旅行するものの喜びとなり、楽しみとなる。

一般に、地球世界の北半球（赤道よりも北）に住んでゐると、

北斗と北極星

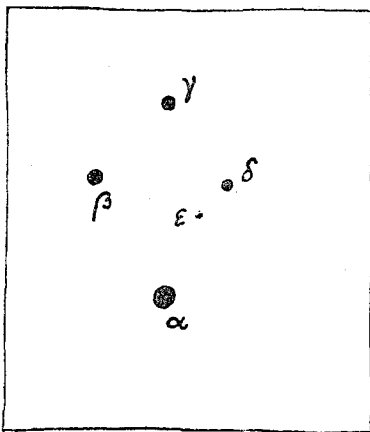


毎日毎夜北極星と其の附近の星々は見えるけれど、其の代り、天の南極方面は、いつまで待っても永久に見えない。従つて、極南の星に憧れる人は、是非とも南洋へ出かけなければならない。

ところが、こゝに一つ不思議な事実がある、かの有名なイタリアの中世の大詩人アリギエーリ・ダンテの詩を讀んで見ると、

『さて右の方、南極へ頭をめぐらせば、
一組みの「四つ星」の輝やける見ゆ。
其の姿は只始めの兩人のみに見らる。
天空は此の星の閃めきにて、燃え上るかと思ふ。
アハ、よるべなき國よ！ 淋しき北天よ！
汝には此の美しき光り永久に見えず、
吾は、つと、四つ星より眼を放つて、
別の天極（北極）を見やれば、
——北斗は既に没して、——
吾は只一人の老人を見る。………』

この「四つ星」といふのは多分かの南天の誇りである「十字架」星座を言ふのだらうと思ふけれど、しかし、不思議にも此の『十字架』は南極から 30° ぐらゐ離れてゐるに過ぎない星々だから、



南十字架

ダンテの母國イタリアからでは（イタリア以外の全ヨーロッパからも、勿論）見えない星である。ダンテの此の詩は、西暦 1310 年から同 1316 年までの間に書かれたものであるのに、南極附近の諸星座といふのは、西暦 1430 年頃、かの航海王ヘンリの時代に遠洋航海が奨励されて、アフリカの南の方まで人々が出かけて行つた時に皆發見されたものであつて、第十四世紀中には全く知られなかつた

星々である。』して見ると、ダンテが、南極附近に「四つ星」が輝やいてゐるなどと書いたのは、全く詩人らしい單なる空想から得た思想で、ちょうど其れに「南十架」星座が當つてゐると思ふのは、實は偶然の暗合であるのか？

「南十字」の名が星に與へられたのは、たか々々第 15 世紀の末以後のことであつて、かのアメリカ大陸の發見者であるアメリカ・ゴズプチ Amerigo Vespucci が此の最初の一人である。ゴズプチが星々の事を書き遺した記録を見ると、1515 年 1 月 6 日の日附で、コチンのアンドレア・コルサリ Andrea Corsali から來た手紙の中に此の星の名がある。又 1550 年に發表されたラムシオ Ramusio の書に、或る無名の航海者からの手紙といふのが載つてゐるが、其の中に、1550 年頃の記事として、



ダンテミラエンナの女たち

(フオイエルハバ画、カールスルーエ市立美術館蔵)

『私どもがリオ・デル・ウロ Rio del Ouro の山へ到着しました時に、十字架の形になつてゐる美しく強き輝やきの四つ星を見ました。南極から此の星々は 30° ばかり離れてゐました。私どもは此の星々を「十字架」と名づけました。云々』

とある。とにかく、此の星座そのものは、よほど以前から人の注意を受けてゐたらしい。尤も其の主な星々の形がほゞ十字架の形になつてゐるといふことは、氣が付かなかつただろうけれど、南「十字架」の代りに、「山の峯」だとか、「鋤」だとか、「菱形」(例へばアメリゴ・エズプチ等) などと呼ばれたこともあつた。

ダンテが天の星座のことを幾らかでも知つて居たろう；といふことは、歴史家の研究によつて、今は殆んど疑ひ無いところである。アレキサンダー・フンボルトも言つたやうに、ダンテは、星の學問に明るいアラビアの學者たちといろ々の交渉を持つてゐた。又、彼れと同じ頃の、少くとも三人の有名な人が、幾度と無く「南十字架」星座を見ただろうと思はれる。即ち其の三人とは、かの有名な大旅行家マルコ・ポーロ Marco Polo と、其の父及び伯父である。此の三人は、西暦 1295 年、即ちダンテが 31 歳の時、當時既に世間の大評判であつた支那旅行を終へて、郷里ベニスに歸つて來たのであるが、歸路は船に乗つて、赤道を越へ遙々南半球を通つて來たのである。次いで 1298 年にマルコ・ポーロが遂行した有名な大旅行の記録には、天文に關した事項は殆んど何も無いけれど、それでも、ポーロの土産ばなしの中に、多分南の天空の珍らしい話などが少なからず聞かされて、ダンテの天文上の常識を養ふ資料となつたに違ひない。尤も、南緯 60 度にある「十字架」星座を、エジプト人やアラビヤ人や、インド人等が既に見て、其の話をヨーロッパ人たちも、多少は知つて居ただろうと思はれるけれど、尙ほ、又「南十字架」の星座は 1225 年にエジプトのベン・アブカサン Ben Abucassan 王が作つたアラビヤの天球儀にも載せられてあるので、其れをダンテも全く知らない筈が無いと思へるけれど。

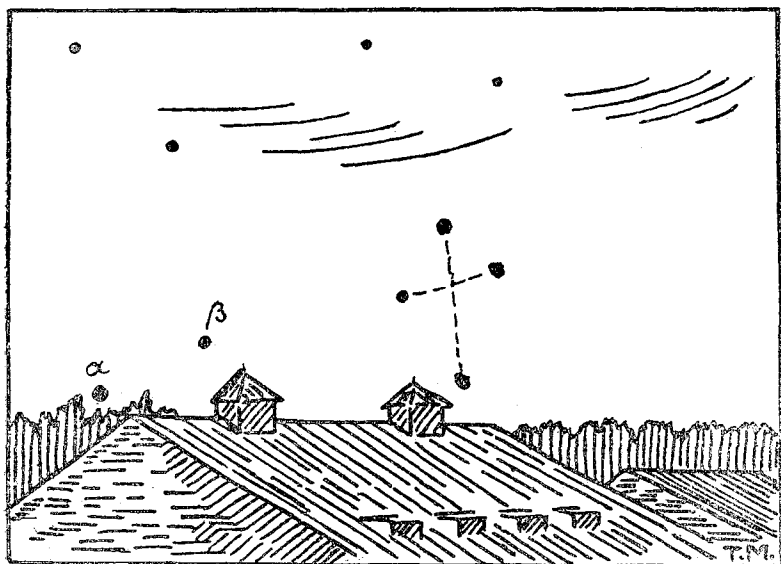
こんなわけで、ダンテが星座のことを可なり知つてゐたろうことは殆んど確かである。但し、彼はかの『美しい光り輝やき』を一度も現實に見なかつたのだから、『淋しき北天よ!』などと書いてゐるのは、よほど誇大して言つたに過ぎないことは言ふまでも無い。實際、「南十字架」や「アルゴ船」は、天の南半球中の最も美しい星座であるには相違ないが、しかし、吾々の北半球だつて、北斗や、オリオンや、カシオペヤ等の美を思ふと、一寸御互ひに美の優劣を判断し難い場合もある。

ダンテが、『北斗も沈む』南國地方の星の消息を知つてゐたよりも、もつともつと驚くべきことは、彼れが詩の中に、

『此の光景は只始めの兩人のみに残されたり』

と言つてゐることである。即ち此の一句の意味は、「此の南十字の星座は昔しヨーロッパとアジアとで見えた」といふのであつて、今日でさへ、高い教養のある人士でなければ、大昔し地中海沿岸で南十字星座が見えたなどといふことを知らないから、ダンテの詩の意味は、よほど確かな知識を物語るものと、言はなければならぬ。

天文學上に言ふ晝夜平分点の歳差といふ現象は、二萬幾千年といふ永い週期を以つて、天上の南北兩極や、春分点や秋分点等の位置を變へるものであつて、従つて、かのエヂプトの偉大なピラミッドが作られた時代には、南十字星座が中央ヨーロッパあたりからでも、南の地平線上に、毎年見えたのであつて、地中海方面では地上 30° ほどの高度に輝き。又、ホーマーの詩が作られたギリシャ文化初期の頃にも、一年の或る時期には、此の星座が毎夜美しく南の地平線上に低く見えた筈である、但し、ホーマーの詩の中に、有名な星のことを多く歌つてゐるに拘らず、一度も此の南の星座のことを記してないのは不思議なやうであるが、しかしホーマーとして見れば、天頂に輝くオリオンや、北斗や、プレヤデスや、ヒヤデスに比べて、南に低く見えるに過ぎない此の星座を、余り美しいものと思はなかつたのは是非もない



臺南師範校の三階から見た「センタウル」星座と「南十字」星座

バイブルの中の諸所に星座の名が載つてある。(アモス書第5章第8節、イザヤ書第13章第10節、ヨブ記第9章第9節及び第38章第31節、等) 此の中で、オリオンの名は必ず見えてゐるし北斗や、プレヤデスは二回づつ記されてある。それに對して、「南方の星」と、ごく一般的な言葉が只一回出てゐるが、之れは、西暦紀元前の時代に、北緯 $31^{\circ}47'$ のエルサレムで見えた筈の「南十字架」星座であること、殆んど疑ひ無い。其の後に作られた昔しの天文學的な恒星目録を見ても、此の星座が、今日と違つた名ではあるが、事實、明らかに記載されてゐる。例へば、プリニウスやトレミー以來のローマ時代に「帝座」といふ名で呼ばれた星座は今の南十字架であること疑ひ無い。之れはキリストの誕生時代には、中央ヨーロッパからは最早見えなかつたのだけれど、當時の學問の中心アレキサンドリアからは南方に低く見えた筈である。今日では、此の星座の見える最北の地はエジプトのルクソア Luxor (日本では臺北) である。プリニウスの大著「博物學」はダ

ンテより十一世紀半も以前に出来た書物であるが、此れを見ると天文學的に言つて、かのダンテが豫言的に言つた其のまゝの事が記されてある。即ち同書の第二卷第 70 節に

『トロゴヂチケや、其の隣りの上部エジプトでは、(時々!) 大熊星座が見えないことがあるが、イタリヤではカノープス星やベレニスの髪といふ星々も見えないし、又、昔しアウグスト帝の時代に帝座と呼ばれた有名な星座も見えない』

とある。

トレミーは、自らアレキサンドリアに住居し、従つて、當時は確かに親しく南十字星座を見た筈であつて、其の作製した恒星目録の中に「帝座」といふのを記載してゐるばかりでなく、かの「エリダン河」星座の南端にあるアケルナ1星といふ輝星をも記入してゐるが、此の星はアレキサンドリアでは其の當時も今日も見えない星で、殊にトレミー時代には常に地下 9° にかくれてゐたものである。トレミーが此の星を、若し其の故郷上部エジプトで見たからその理由で記入したので無いとすれば、少なくとも、彼れは此の星のことを他人から聞いた話によつて知つたとしなければならぬ。若し此うした説明がトレミーの場合に許されるものならば、ダンテの場合だつて同様に、他から聞き傳へられて、得たものであるとするのに無理はあるまい。とにかく、ダンテは、此の輝やかなしい「四つ星」の何等かの知識を、古い文書や學術書の研究から得たことが最も真に近いと見なければならぬ。かの最も光輝の強い星を南端に持った形の「南十字」星座は、トレミーの時代の頃にはまだアレキサンドリアの地平から $6^{\circ}10'$ も上に見えてゐたのだが、それより二世紀半も以前の、ヒパルコスが同じアレキサンドリアを訪れた時には、更に其れよりも高かつたのである。だから、此の二人の人は南十字の星々を其の特異な形によつてよく知つてゐたに違ひない。昔のファルネーゼの天球儀にも之は「帝座」と記されてある。

つまり、ダンテが南の天空の現象についての深い親しみと、更

に歳差の結果といふ考へにより、總ての疑問が解けるのである。ダンテが天文學上の事に特に興味を持ち、天界の總ての現象に親しみ、其等の知識を以つて、かの超自然的な感じを詩に表はさうとしたと思はれる、こういふ事は、ダンテの偉大な詩作のいろいろな場所に見られる。始めにも記した如く、『遠い南方の國々では北斗さへ沈むのだ』といふ事をダンテが知つてゐるのは、彼れの世界觀の正確さを證明するわけである、しかし、彼れの詩「地獄」の第二十三章に、又もや南極の星々の事をかいて、

『

と言つてゐる。之れなどは、よほど深く天文學を研究した人にして始めて言ひ得ることである。實際、ダンテのやうな人は、現代の普通のインテリゲンチヤ以上に「南十字」星座の學理的知識を持つてゐると言つて好い。

明石の中央標準時子午線標再建さる

我が日本の中央標準時はグリニチ東經 135° の子午線を基準としてゐることを、既に世に廣く知られてゐる所である。此の子午線が兵庫縣明石市を通過してゐることも亦一般に知られてゐる、近頃、明石市では此の標準子午線を嚴密な觀測から決定し、新しい標柱が建てられ、去る一月二十六日、同市人丸神社に於いて盛大な建設式が擧げられた。下記は其の報告書である。

明石市教育會 大日本中央標準時子午線標識再建經過報告
昭和八年紀念

昭和三年十一月長クモ今上陛下御即位ノ大典ヲ舉行セサセ給フニ際シマシテ、我等國民舉ツテ愈々「天行健、君子以自彊不息」トノ正氣カラ、息ムニ息マレス精神一途ニ、天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉ラムトノ意氣勃々タルモノガ湧キ立チマシタコトハ今更言フヲ俟タナイノデアリマス。

我が明石市教育會ハ此ノ秋ニ際シマシテ、何カ意義深キ記念事業ヲト幾度カ役員會ヲ開キ、又再三評議員會ニモ諮問致シマシタ結果、我が明石ヲ通過スル日本ノ中央標準時子午線ヲ測定シテ、其ノ標識ヲ適當ノ位置ニ再建設スルノ件ヲ決議致シマシタ。